

（論文）

# 歴史と宗教、そして交錯する記憶 —Identityを巡るウロボロスの輪—

田村紀之

## § 1 はじめに

### 1.1 歴史と宗教

ヘーゲルにとって最大の関心の的は、歴史の問題と宗教の問題だった。E・カッシーラーによれば、この両者は互いに融合され不可分の一体となっていた。つまりヘーゲルは、「宗教を歴史の言葉で、そして歴史を宗教の言葉で論じた」わけである。

筆者がヘーゲルに最初に接したのは学生時代、彼の『歴史哲学講義』を手にしたときだった。従前の歴史論を「初歩的歴史」、「反省的歴史」、そして「哲学的歴史」と三分類したうえで、自分の歴史を哲学的と称して最高位に置く序文からして、胡散臭さを感じさせた。そして、東洋世界、ギリシャ世界を経て、ゲルマン世界という、理性を軸とした葛藤の弁証法、あるいは進化の過程を経て人類の理想が達成されたかのような歴史描写に呆れ果てた。これは彼の「宗教」だ、と直感したのである<sup>1</sup>。

そのころの筆者はまだ、宗教は国家の成員たちの観念的で非現実的な意識に過ぎず、「人間の発展段階の観念的な形態」、あるいは「倒錯した世界意識」にすぎないというマルクスの主張に共鳴していた<sup>2</sup>。ところが後日、マルクスの史的唯物論が、ヘーゲルの弁証法を倒錯させ、換骨奪胎したものに過ぎないことを知るに及んで、狼狽し苦悶した。当時大流行だったサルトルなどの実存主義者たちと似たような苦境を、個人的にも体験したわけである。E・サイードのいう、西欧中心主義としての「オリエンタリズム」という言葉すら知らなかったころの話である<sup>3</sup>。

### 1.2 ルワンダと東アジア

服部正也の『ルワンダ中央銀行総裁日記』の増補版が2009年に刊行された。初版発行が1972年だったが、いま読み返しても示唆に富んだ名著といえる。開発経済学のまたとない入門書として推奨したい。旧宗主国（ベルギー）の利害関係者や国際金融機関の、押しつけがましい画一的な視点からではなく、現地人の利益を最優先して処方箋を準備しようと苦闘する姿勢には感服させられる。増補版では「ルワンダ動乱は正しく伝えられているか」という一文が添えられており、対立する民族の片方を正義派と見立て、他方を悪として非難する西

洋の主要メディアの報道ぶりを痛烈に批判する<sup>4</sup>。

筆者自身、ルワンダについての知識は、本書の初版と、2本の映画、すなわち、『ホテル・ルワンダ』（2004年）および『ルワンダの涙』（2005年）程度のものでしかなかった。しかし服部正也が指摘するように、ルワンダにおける虐殺が「積もる怨念と恐怖が爆発したときの民衆の凶暴さ」の現れとみて、フランス解放後の対独協力者への攻撃、関東大震災時の朝鮮人虐殺、そしてアメリカのロス暴動などの諸例を想起せよと言われると、著者の主張を首肯せざるをえなくなる<sup>5</sup>。つまり、ルワンダ動乱は決して、遠くて小さな国の特殊な出来事と済ませてはならないのである。これらの事例を同列に並べることの是非はともかくとして、メディアの偏向した情報への警戒心を怠ってはならないことは、筆者も「メディア・リタラシーの自覚」問題として強調したことがある<sup>6</sup>。

この書物との出会いがきっかけだったとは言い切れないが、筆者はいつしか、開発経済学に、そしてポストコロニアル問題としての日韓朝関係に興味を寄せることとなり、今日に至っている。韓国への関心は当時隆盛だったアジア NIES 論、したがって台湾その他の地域の経済発展を論じることを余儀なくさせた。これらの国・地域の研究は否応なしに、政治と経済を分離して考えることが如何に無理な課題であるかを、十二分に悟らせてくれた。

東西冷戦という大枠のなかでは、アジア NIES は自由民主主義体制を称賛するショーウィンドーの役割を果たしてきたが、その一方では、中国という巨象の台頭への警戒心と、NIES の躍進への危機感の高まりが欧米諸国で目立つようになってきた<sup>7</sup>。米中間の「新冷戦」がこのころすでに芽生えていたのである。

当時、韓国では、筆者のいう権威主義的な政治体制と民主化を求める陣営との熾烈な闘争が繰り広げられていた。全斗煥元大統領の死去の報道（2021年11月23日）は、長く続いた軍人政権の時代が確実に終わったことを実感させるとともに、民主化の結果として誕生した後継体制の交代劇の是非についての疑問を再確認させるものとなった。

繰り返しになるが、朝鮮半島情勢と台湾海峡をめぐるメディアの宣伝戦には、目にあまるものがある。これに翻弄されてはならない。

### 1-3 アイデンティティという難問

本稿では、アイデンティティの問題を取りあげる。個々人にとってのアイデンティティとは、自分が何者であるかを問うことである。自分が何処から来たものであり、なぜ此処にいるのか、また、何処に行こうとしているのかについて、思いを巡らすことである。また、個々人は孤立して生きてはいけないという意味で社会的存在であることに気づいたときには、他者との関係、つまり、自分の身の寄せ場を探し求めることにほかならない。

前稿で筆者は、「ナショナルなもの」という得体の知れない難題に挑戦し、地雷原に立ちすくむ自らの姿をありのままに告白したうえで、「いかなる民族もその固有の偽善ぶりをもっており、これを自らの美徳と称する」というニーチェの箴言を引用して稿を閉じた。これについて木村英明氏から、地雷原ではなく、「ウロボロスの輪」というべきではないかとのコメントをたまわった。言い得て妙なりと、まさに膝を打つ思いで、さっそく本稿の副題に借用させていただいた。ウロボロス (ouroboros) とは、自分の尻尾を飲みこんで円形をなす蛇（あるいは龍）のことをいうが、明らかにここで筆者は、果てしない堂々巡りの意味でこの言葉を用いる。じつは、アイデンティティとナショナリズムとは密接不可分の関係にある。したがって、どちらがより基底にあるのかという問いは、鶏と卵のどちらが先かを問うに等しい。

たしかに、アイデンティティ抜きのナショナリズムというのは想像しにくい。とりあえずは、後述する「死んだ祖先との協定」、あるいはより厳密に言えば祖先との協定の記憶、そして記憶の伝承としての観念の復元再生努力として、アイデンティティを理解しておこう。これは、土地、言語、宗教、民族性などを基礎とする集合表象の総称であり、広義の宗教ともいえるものである。ここで早くも筆者が、ウロボロスの輪という陥穽に陥ったことを認めざるをえない。

行論の都合上以下では、筆者がここ数年取りあげてきた話題を繰り返すことが多い。その意味で本稿は、既往の議論の補論と了解されたい。

## § 2 民主主義再論

### 2-1 文部省教科書

そもそも、「民主主義」とは何であり、何であったのか。また、何であるべきなのか。特に敗戦後の日本において、民主主義はどのようなものと捉えられてきたのか。

GHQの検閲下ではあるが、1948年から49年にかけて文部省が、教科書『民主主義』を刊行した。これが文庫化され、話題をよんでいる。そこでは、民主主義は、「個人個人の努力ではとうてい実現できない仕事を、国民のお互いの協力によって達成しうる方法」と定義されている<sup>8</sup>。短命に終わった菅義偉政権の標語、自助・共助・公助の序列を彷彿させる。そして主権在民を、「民主国家では、すべての政治の源は国民の意志にある」という言葉で説明している。

しかしいつの間にか、国民の意志は「精神」に置き換えられ、解説の内田樹が指摘するように、軍国主義の一時期を除けば、民主主義を求める日本国民の精神は戦後に受け継がれているという、「司馬史観」に繋がる明治賛歌を内に秘めた構成となっている<sup>9</sup>。いずれにせよ、「政治が国民のうえに君臨する尊大な主人公ではなく、国民のために奉仕する忠僕である」ということは、民主主義によってのみ保障される。国民生活をできるだけ幸福に、豊かに安全にするための政治は、政治的権力が国民の手の中にあるかぎり、から手形に終わる心配はない」という断言は、現在の日本の実態にはそぐわない<sup>10</sup>。政治権力が国民の手中にないことの証左なのだろうか。

### 2-2 中東欧諸国の苦悩

ファン・リンスの『民主体制の崩壊』は体制変動を、ある一群の政治的諸制度から別の一群へと正統性 (legitimacy) が移行することによって生じるものとして説明する<sup>11</sup>。彼が考察の対象とするのは、自由な普通選挙を通じた政権交代の可能性を保障する民主体制の一類型としての「競争的」なデモクラシーであり、選挙ごとに連立の組み換えを考慮せねばならない統治権力の正統性問題である。政権の正統性の評価を左右するのは、その安定性とパフォーマンスである。ここで重要な役割を果たすのが、政権の問題解決能 (efficacy) と政策遂行能力 (effectiveness) とリンスはいうのだが、後2者の違いは明確ではない。

それよりも重要なのは、その定義からして「民主体制には非忠誠的反対派が必ず存在する」という事実である<sup>12</sup>。しかし危機的状況を別にすれば、政治的アクターとしての非忠誠的反対派は少数派だろうから、政権参加意欲のある反対派、すなわち準忠誠的反対派を如何に取り組むかが権力側の課題となる。これに失敗すれば民主体制は崩壊の危機に瀕するが、その過

程はリンスの膨大な事例比較からも要約しきれないほどに複雑である。体制の回復（リンスのいう再均衡）も、ド・ゴールというカリスマ的権威者の登場など、特異な経験に俟つことが多い。

リンスの「忠誠」概念に人口移動という要素を加え、冷戦後の中東欧諸国における権威主義政権の誕生と持続という現象を考えると、I・クラスとS・ホームズのいわゆる『模倣の罫』問題に悩むことになる<sup>13</sup>。この二人の著者によれば、これまでモスクワの指令に従わなければならなかった中東欧諸国民は、自由を求める多くの西欧への亡命者を出してきたが、西洋を模倣してきた結果は、ブルッセル（EU本部）の指令に服することになった。これに追い打ちをかけたのが、メルケル・ドイツ首相（当時）によるイスラム難民の受け入れ割り当て提案だった。自国民の流出と大規模な難民の流入という事態は、中東欧諸国民にアイデンティティの不安を増大させ、強力な指導力を持った人物に自らの将来を託す道を選ぶようになった。プーチンのロシアはこの流れを巧妙に支援した。そして、ヨーロッパ全域にわたるポピュリズムの興隆を模倣したのが、アメリカのトランプだった。

ここで鍵となるアイデンティティという言葉を著者たちは、「死んだ祖先との協定」と定義する<sup>14</sup>。同化しない移民の受け入れを危惧するのは、ナショナル・アイデンティティの希薄化への恐怖からである。また、アイデンティティは、ローカルな（内部での）アイデンティティとグローバル（外向けの）アイデンティティの使い分けを余儀なくさせ、政治的トラウマに追い込む。この点に関して両著者が後述するV・ハヴェルらを、「統合失調症ではないとしても、慢性的に偽善者」だと決めつけるのは如何なものか<sup>15</sup>。ともあれ、「死んだ祖先との協定」であるアイデンティティを、単なる協定にすぎないと考えるのか、祖先との約束だから大切にしなければならないと思うのかによって、議論の方向は真逆の関係に立つ。これについては、別途取り上げよう。

### 2-3 代替プログラムの所在

だが中東欧諸国の人々は、単純に西欧の民主主義を鏡とし、これを模倣してきたわけではない。

たとえば既述のV・ハヴェルは、オルテガやハイデガーに言及しながら、「西側の民主主義、つまり、伝統的な議会制民主主義が、我々よりも深遠な解決法をもたらしていることを示すものは現実には何もない」といい切っている。要するに西側の民主主義は技術文明、産業社会、消費社会に振り回されて無力化している。責任を伴わない自由は幻想であり、ソルジェニーツインの言葉を引くならば、伝統的民主主義は慢性的に暴力や全体主義に対峙できない<sup>16</sup>。このことを熟知しながらも、「嘘の生」でない「真の生」を求めて西側のメディアに訴えざるをえなかったハヴェルら全体主義体制への対抗者たちの苦悩を軽視すべきではない。

ハヴェルが好んで引き合いに出すのは、青果店主がショウウィンドウの玉ねぎと人参のあいだにそっと置くスローガンである。そこには、『共産党宣言』の最後の一句、普通は「万国の労働者よ、団結せよ」と訳されている一文が書かれている<sup>17</sup>。これによって店主は密告から免れるとともに、無意識のうちに独裁政治の支持者、加担者となってゆく。密告者からの隠れ蓑となるこのスローガンは、体制イデオロギーへの忠誠を誓う「記号」の機能をはたす。つまり、操作され統制された「嘘の生」を生きるための儀式を繰り返すことを意味する。ハヴェルはこれを、体制のアイデンティティのために人間としてのアイデンティティを放棄する、と表現している。



問題は、現存する独裁体制へのオポジション、つまり代替する政治的プログラムを提案する政治勢力がいるかどうかである。どのような政治的プログラムのもとで、文字通り、力なきものたちの力をどのように結集するのか、その可能性についての展望の有無である。しかし皮肉なことに代替プログラムはドイツ極右勢力のスローガンと化し、ハヴェル自身は、「真の生」を「父祖との約束の地の伝統」に、すなわちアイデンティティに求めざるをえなくなってしまう。

要するに、ピロード革命を模倣しているのは、ドイツをはじめとする西欧諸国の右派なのだ<sup>18</sup>。ここにあるのは模倣の罫ではなく、模倣の連鎖、それも、合わせ鏡のもとでの虚像の連反射である。この過程で、ロシアの影が薄れたわけではない点にも留意しておきたい。

### § 3 歴史主義は貧困か？

#### 3-1 方法論的個人主義と合理性

歴史は、どこから、いつの時代から話を始めるかによって、筋書きが大きく変わりがちである。自由を求める移住者の歴史は、クンデラら中東欧からの亡命者から書き始めるべきではない。そのほんの少し前、ファシズムやナチズムの嵐が吹き荒れていたときには、自由を求める多数の亡命者がアメリカその他の地へと逃れた。

そのひとりであるカール・ポPPERは名著『歴史主義の貧困』において、「科学の進歩は、孤立した努力の結果なのではなくて、思想の自由な競争の結果」であるとし、進歩はデモクラシーに依存すると強調した<sup>19</sup>。ただ彼は、〈歴史主義〉(historicism)と全体論(holism)、とりわけマルクス主義を糾弾することに熱中するあまり、いわゆる方法論的個人主義(methodological individualism)に関しては寛容であり、合理性(rationality)についても脇の甘さを見せた。つまり、「社会的事態のすべてではないにしても、その大部分においては合理的要素が存在している」とし、「人間というものは、まったく合理的に行動することはまずない」といいながらも、「しかし人間は、それにもかかわらず、多かれ少なかれ合理的に行動する」と結論づける<sup>20</sup>。孤独を求めて皆が山に登れば孤独な登山者はいなくなるという、「合成の誤謬」(Fallacy of Composition)を熟知しているポPPERだが、彼が主張する方法論的個人主義と合理的行動の関係については、別途検討の余地が残る。

残念なことに現在の経済学は、目的合理性に徹した個人を基礎に据える新古典学派によって完全に制圧され、経済学者は自らの殻に閉じこもり、視野をますます狭めている。そこでは、極めて限定された意味での合理的な行動主体、わけても個人的な効用の最大化だけを指す消費者の、完全に競争的な市場における行動の分析に関心が集中されている。そして集団の行動は、このような合理性をもった個人の総計として説明される。効用最大化行動も完全競争市場も、思考訓練のための道具としてはこの上なく重宝な実験室となりうるが、この「理論」的演習はいつしか、現実の経済との錯覚を招いてしまう。

個人レベルでの合理的行動と社会集団の合理的な観察結果とが合致しない例は数限りなくあるが、ここではJ・トービンが示すケインズの流動性選好理論の正当化を紹介しておこう。ある投資家を考え、彼(彼女)は資産を貨幣で持つか債券で持つかの択一的な選択をしているとしよう。つまりこの投資家は危険回避のために、資産の一部を貨幣で持ち、残りを債券に投資するという分散型ではなく、ある債券利率を目安にして、利率がその目安以上の

水準になれば全額を債券投資にまわし、逆にそれ以下になると債券をすべて売り払って全資産を貨幣にかえる。要するにこの投資家は一発屋ではあるが、これ自体は合理的行動である。しかし、各人が目安とする利子率はそれぞれに異なるから、限りなく多数の投資家の全体としての資産運用は、貨幣と債券の両方を同時に保有する、つまり分散型の行動となる。結局、ある合理的行動様式を集計した結果は、同じタイプの合理的行動ではなく、別の型の合理的行動として観察されることになる<sup>21</sup>。

ポッパーのいう「多かれ少なかれ合理的に行動する」という認識ではなく、ある合理性の集積がそれとは異質な合理性を産みだす可能性がある点に留意したい<sup>22</sup>。

合理性とは、平たくいえば、何らかの意味で首尾一貫していることをいう。この意味での合理性は、一見論理矛盾と思われる判断にも、価値観の首尾一貫性（価値合理性）が見られることを想起させる。殺人は悪だから殺人犯は死刑に処すべきだ、という見解がその一例である。さらに、広義の合理性は、個人の行動に限定されるわけではなく、個人の行動の大枠を構成する人間集団、つまり、社会（システム）についても検討されなければならない問題である。上述の「合成の誤謬」は、個人の合理性を、社会の合理性の前提であると錯覚してはならないことへの警鐘である。

### 3-2 デュルケームの宗教論

方法論的个人主義を、「社会的事実、この事実が一部をなしている社会体系の関数である」という言葉で明確に批判し、その持論を維持してきたのが、E・デュルケームである<sup>23</sup>。同じ主張を彼は、「社会現象は、個人においてではなく、集団において生じる」、あるいは、「集合感情は、物質的な客体に固定されることによるのみ、みずから意識することができる」とも表現している<sup>24</sup>。宗教的観念、つまり正邪の区別の源泉をトーテミズムに求めるデュルケームの所論には、個人的トーテミズムと社会的トーテミズムの関係という二元性をどう考えるかという難問は残るが、社会は個人の単なる集まりではなく、言語などと同様に、表象の共有がその基礎にあるという説には傾聴すべき点が多い。つまり、社会とそれを構成する個々人のあいだには、両者がともに他方の存在を前提としている、という相互依存の関係がある<sup>25</sup>。

デュルケームによれば、「聖なる事物、すなわち分離され禁止された事実に関わる信念と実践が連動している体系」としての宗教は、教会などの「道徳的共同体」を中心とした集合的なものであり、この種の共同体を持たない点で呪術と区別される。しかしその境界はかなり曖昧であり、キリスト教の神と悪魔との関係と同様に、宗教と呪術が相互依存的に共存する可能性は排除できまい。ともあれここでの彼の力点は、宗教があくまでも集合表象の一形態である、という点に置かれている。しかも、科学的諸概念も宗教に起源をもち、科学的思考は宗教的思考のより完成された形態にすぎないのだという<sup>26</sup>。

科学と宗教の関係について、ここまで言い切れるデュルケームには凄さを覚えざるをえない<sup>27</sup>。

## § 4 捨てられない記憶

### 4-1 「在日」の位相と入管行政

今や在日は、韓日両国にとって、捨てるに捨てられない「粗大ゴミ」かもしれない。いさ

さか自嘲気味にそう語るのは朴仙容だが、それでも、多民族社会・日本における在日の役割に希望を寄せる。在日が臆することなく堂々と声を張ることのできる時代がきた、というのである<sup>28</sup>。確かに筆者の周辺にも、韓国・朝鮮人であることに誇りを持って教えられ、そのように育てられてきた在日は多い。そして、臆することなく、誇らしく、自らが在日であることを語る人たちも少なくない。

しかし事実の問題として、日本が単一民族の国であると信じている日本人が減ったわけではなく、むしろこの「神話」を強調する陣営の声が高まっている。筆者が朴仙容ほどに現状と将来を楽観視できない理由は、すでに前稿、田村 [2020] で詳述しておいた。要は、ナショナリズムに名を借りた自民族中心主義が世界的に蔓延しているというのが、筆者の現状認識だからである。

新聞報道によれば、出入国管理庁はこのほど、「特定技能」の持ち主と認定された外国人就労者について、農業や製造業、サービス業などほぼ全業種で、事実上「無期限」の在留を可能にする方向で制度改定の検討に入ったという。明らかにこれは、コロナウイルス症の感染拡大などによって一層深刻化した人手不足への、応急的な対応策にすぎない<sup>29</sup>。もともと、「技能実習」や「特定技能」名目の外国人労働者受け入れ政策については内外から、事実上の人身売買ではないかという批判が絶えなかった。移民・難民問題にいかに対処すべきかという「開国」論議に正面から取り組みことなく、ただ目先の人手不足問題への対策として、なし崩し的に狭い門戸をこっそりと広げてゆくという手法が限界に達していることは明白だ。

戦後日本の入管行政の発足の経緯から現状についての概要は、水上洋一郎論文「入管改革への課題」が要領よく整理している<sup>30</sup>。入管行政に再度光が当てられる契機となったのは、スリランカ人女性の死である。これが由々しき人道上の問題であることはいままでもないが、しかしこの事件を「開国」問題全般と切り離し、個別的な事例として済ませてはならない。

もちろん、以前に墓田桂 [2016] の主張を引いて論じたように、難民・移民問題は社会的・文化的、そして国際的な摩擦や衝突を不可避とし、苦悩に満ちた決断を迫るものである。だからといって、いつまでも門戸を閉ざしたまま、この問題を避け切れるものではない<sup>31</sup>。国際人権条約加盟国としての日本の姿勢が問われているのである。

#### 4-2 テロリズムと蟹

藤崎康はその著『戦争の映画史』で9・11事件（2001年）をとりあげ、テロとメディアの「危うい親和性」を強調する。すなわち、テロリストたちは自らの行動がカメラによって撮影されること（「表象」されること）をあらかじめ計算したうえでテロを決行したのであり、実行犯たちは「表象」のために死に、犠牲者たちは「表象」のために殺されたのだという<sup>32</sup>。テロリズムを戦いの、つまり広義の戦争の一形態とみるならば、メディアと戦争の親和性は映画に限らず、メディア一般との関係として捉えるべきだろう。

脇道にそれるようだが先般、ある楽器店で二枚の音楽CDを見つけ、さっそく聴いてみた。その一枚は、『1941年の哀愁：歌謡曲でめぐる開戦前夜の空気』（グラモクラブ社、2018年）であり、筆者の生まれた年に流行した22曲を集めたものである。国民歌謡と銘打った高村光太郎作詞の「歩くうた」ほか、「あゝ日の丸だ前進だ」や「なんだ空襲」など、背筋が凍りつくようなものまでが、「哀愁」としてまとめられている。

もう一枚のほうは、『あじあに乗りて：歌と満州』と題するもので、やはり同年に同社から発行されている。名曲といわれる「戦友」のほか、「満州娘」など、今も歌いつがれているも

のが少なくない。そのうちの「満洲国国歌」は、「天地有了新満州（天地のうちに新満州あり）」という中国語の歌詞で始まる。堀雅昭『戦争歌が映す近代』によるとこれは、山田耕筰による「大満洲国国歌」に次ぐ、第二国歌だという<sup>33</sup>。CDの表題は、収録された曲のひとつを取ったものである。歌詞集には辻田真佐憲の「音楽でたどる表象としての満洲」という解説が付されている。しかしここにあるのは、明らかに日本人にとっての「表象」であり、郷愁と鎮魂である。つまり、この「表象」によって犠牲となった中国人への謝罪意識は見事に欠落している。

付言しておく、堀雅昭は戦争歌（いくさうた）の起源を『古事記』に求めている。しかし、これは日本特有のものではない。有史以来、洋の東西の歌謡や舞踏は、戦いの儀式と切り離せない。さらに付言すれば、岩籠りした天照を女神がその性的魅力で外に呼び出すという神話も、どうやら日本固有のものではないらしい<sup>34</sup>。

映画と戦争との親和性に話を戻すならば、特別攻撃隊（特攻隊）を取り上げざるをえない。上述の9・11事件そのものが、旧日本軍の特攻攻撃を範とするものだといわれている。「聖戦」のために自らの命を捧げるという意識と行為には、疑いなく共通する何かがある。前稿で筆者は朝鮮人特攻兵に関して、そのアイデンティティの所在を問題にした<sup>35</sup>。高倉健と田中裕子夫妻が演じる映画『ホタル』（2001年）ではこの夫婦が韓国を訪れ、出撃死した朝鮮兵の家族たちに、出撃前夜の様子を語り、詫げる。日本人のお前が生き残り、なぜ彼が死なねばならなかったのかと問い詰める家族たちだが、「自分は大日本帝国のために死ぬのではない」といい、「アリラン」を歌ったという死の前夜の説明に納得し、この夫婦を温かく受け入れる。

この映画で螢は、二度登場する。最初は彼らが通い詰めた富屋食堂に、そして二度目は、韓国で高倉健夫妻が墓参する場面で、である。最初の螢はある特攻兵が、自分が死んだら螢になって帰ってくると食堂の女将に約束したあと、表戸の隙間から入ってきたものだった。そして二度目の螢は、山所（墓場）で夫婦の周囲を大きく旋回する。中村秀之『特攻映画の系譜学』は、「軍神」や「神鷲」ではなく、螢を特攻死、ひいては戦争という狂気の犠牲者への哀悼の表象としたところに、この映画の画期的な意義を見出す。しかし同書も指摘するように、時流はふたたび、特攻賛美の方向へと流れている<sup>36</sup>。

9・11の同時多発テロへの米国の報復は、2003年に開始された米軍のイラク派遣、S・フセイン元大統領の処刑（2006年）、そしてビン・ラディン容疑者の殺害（2011）をもって、アメリカなりの決着をみた。しかし、開戦の理由とされた「大量破壊兵器」の存否は今も明らかでなく、ベトナム戦争における1964年のトンキン湾事件との類似性という疑惑を残したまま、現在に至っている。中東の混乱は大量の難民を産み、ヨーロッパ諸国を揺るがせている。上記の「模倣の罫」論は、錯綜した因果関係をあまりにも単純化しすぎている。

#### 4-3 公的記憶と不都合な真実

いま、筆者の手元に2冊の本がある。そのうちの1冊は、鄭殷溶著『ノグンリ虐殺事件』であり、いまひとつは高暲兌の『ベトナム戦争と韓国、そして1968年』である<sup>37</sup>。どちらも米国がらみの悲惨な出来事だが、一方では被害者として、他方では加害者として、韓国人が戦争に関った。若い世代の人々には遠い昔の出来事とされかねない虐殺事件だけに、ぜひとも記憶にとどめておきたい。

老斤里（ノグンリ）事件とは、朝鮮戦争の勃発直後の1950年7月26日から29日にかけて、忠清北道永同郡黄淵面老斤里の京釜鉄道路線付近一帯で起こった米軍による民間人多数



の殺傷事件である。鉄道線路上に集められた避難民に爆撃が加えられ、双子トンネルと呼ばれるアーチ型の二連のトンネルに逃げ込んだ者たちには、地上軍からの銃弾が浴びせられた。著者の鄭殷溶（遺族会会長）によれば、この事件の直接の犠牲者は死者150人、行方不明者13人、負傷者55人とのことだが、7月29日に朝鮮日報記者が、黄淵面で米軍により殺された400名の死体を目撃している。事件の詳細はAP通信によって1999年9月に世界に向け発表された。米韓両国による合同調査の結果、2001年1月、クリントン大統領による遺憾の意の表明に至っている。なおこの事件はイ・サンウ監督により、『小さな池 1950年ノグレンリ虐殺事件』として映画化された。

つぎに、ベトナム戦争時の韓国軍が起こした虐殺事件を扱った、高暲兌の著作に目を転じよう。じつはこれも最近、『記憶の戦争』の題で2018年にドキュメンタリー映画化されている。監督のイギル・ボラは1990年生まれの若い女性。本名はイ・ボラだが、父親の姓イに母方の姓を付けて、「この道のみよ」の意味でイギルとしたという。「勝つボラ」と読み替えたいくなるほどに、韓国社会では長らくタブー視されてきた問題に正面から取り組んだ勇気を讃えたい。当然ながら、この映画化に反発する陣営からの運動もあったが、その様子をも丹念に映像に収めている。

劇場での上映終了後、リモート形式ではあったが、監督・制作者と観客との対話の機会もたれた。最初に挙手した若い女性が、日本人は中国では悪いことをしたが広島では被害者だったと、訳の分からない発言をしたのには閉口した。もしもこの質問者が「アメリカの戦争犯罪」の一環として原爆投下を持ち出したのだとすれば、彼女はベトナム人と日本人とともに被害者として同列に並べている。あるいは逆に、日本人も韓国人も同罪だというのであれば、韓国軍が犯した虐殺行為を救済することになってしまう。

事件の舞台はベトナム中部のクアンナム省。1968年1月20日の朝、小隊規模の韓国軍海兵隊員がトイボ村に進入し、銃と手榴弾により住民145人を殺害した。ついで同年2月12日の朝、フォンニャット（第1の風の意）村とフォンニ（第2の風）村の両村に、韓国軍が大挙して入ってきた。両村合わせても200世帯に及ばない狭い地域で、記録されているだけでも74人の住民が惨殺された。住民からは神木視されてきたガシュマルの大木の名をとって、この事件は「ガシュマルの木の虐殺」と呼ばれている。以上は高暲兌の著書による。

韓国のベトナム派兵は朴正熙大統領時代の1964年、非戦闘員120人の派遣に始まり、青龍部隊（海兵第2旅団）、猛虎部隊（陸軍第1師団）、白馬部隊へと規模を拡大し、1966年現在で4万2500人、延べ人数では32万5千500人余に達した。韓国兵の死者は4千400人（佐野孝治 [1992] による）にのぼり、負傷者と枯葉剤被害者も約3万人<sup>38</sup>。このほか、韓国兵と現地女性との混血児（ライダハン）問題など、「公的記憶」には残らない記憶も多い<sup>39</sup>。

イギル・ボラ監督作品のタイトルは、韓国のベトナム参戦の記憶についての、対立する諸陣営間の記憶の差異に起因する闘い、の意と解したい。問題は、加害と被害の立場の逆転に終わらない。実態は、参戦者、遺族、傍観者、そして戦争経験のない若い世代のすべてを巻きこんだ、単なる立場の逆転という位相をこえた、はるかに錯綜したものだったに違いない。注意したいのは、ベトナム参戦による犠牲があったから「漢江の奇跡」が可能になったのだ、という論理の行く先である。戦後日本の繁栄を「靖国の英霊」のお陰とみる見解と通底する部分が多い。ここには、負の記憶を何とか別のものにすりかえたいという心情と、これを操作する力学の作動がみられる。

そしていまひとつ、日本人には記憶に留めたくない新聞報道があった。閔妃暗殺事件（1895年）で主要な役割を演じた堀口九万一の書簡が発見された。堀口が友人の漢学者にあてた書簡のなかで、自らが閔妃殺害に加わり、「存外容易にして、却てあっけなく申候」とその時の様子を述べている、というのである。この事件の背景、計画の発案と実行、事後の処理等についての詳細は、すでに拙著〔2012〕で説明した。堀口九万一が計画の立案だけでなく、直接手を下したと自慢げに語っていたというのが、この報道のポイントである<sup>40</sup>。

## § 5 「新冷戦」時代への危惧

### 5-1 義和団事件の記憶

2021年9月7日、中国の主要紙は一斉にある写真を掲載した。120年前、清国が欧米日の列強11か国に屈伏し、前年からの義和団事件の終息をはかるため、北京議定書（辛丑条約）への調印を余儀なくされた場面の写真である。当時、香港問題やウイグル自治区での人権問題を契機に、米中関係が急速に緊迫化しはじめていた。中国側からすれば、お前たちに偉そうな口をきく資格があるのかという、反発をこめた強烈なメッセージだった。しかし多くの日本人にとって、義和団事件はおろか、日清・日露戦争の記憶すら定かでない。ウラジオストックという地名に込められた思いが、「真珠湾を忘れるな」と同類のものだと知っている日本人はさらに少ない。上述した閔妃暗殺事件が、朝鮮半島をめぐる日露のヘゲモニー争いの過程での蛮行だったと素直に認める日本人はいっそう稀である。

たしかに、屈辱の記憶は払拭し難い。したがって日本人の対露感情も、「シベリア抑留」を語りはじめれば際限のない被害意識の表出となる<sup>41</sup>。これに対し加害の記憶は、都合よく消し去ることができる。しかも困ったことに、被害者が同時に加害者ともなり、その双方の記憶があるときには交差しあい、またあるときには、そのどちらかがまったく欠落してしまう。個人レベルのアイデンティティにとって、前者はR・D・レインのいう「引き裂かれた自己」としての危機であり、後者もまた、過去の記憶の「石化」(petrification)による自己防衛といえる。ただしアイデンティティは、外的な力によって容易に操作される。個々人の記憶が、目に見えぬ権力によって、その権力の恣意によってつぎつぎと書き換えられてゆく恐怖は、G・オーウェルが活写した世界である<sup>42</sup>。

### 5-2 中華民族という虚構

武藤秀太郎はその著『「抗日」中国の起源』において、1919年の「五四運動」の意義を、中国にとっての「近代」から「現代」への移行を画するものとして強調する。この運動を転換点と位置づけたのは毛沢東だが、日本国内では単なる反日運動の高揚としかみない論者が少なくない<sup>43</sup>。同年の3月1日には朝鮮で「三一独立運動」が起っており、辛亥革命（1911年）以来の長期的かつ国際的な視野からの評価が必要だろう。ただ、上記の義和団事件をふくめ、対外関係が緊張するたびに「近代」の屈辱の記憶が一定の政治的な意味を込めて持ち出される点に注意しておきたい。

近年、中国に注がれる目はけっして暖かいものではない。「一带一路」戦略は経済大国イメージの誇示には役立つだろうが、黄禍論を彷彿させかねないリスクをとまなう。中国の指導者もこの点はわきまえていることだろう。日本では、台湾有事論を煽る議論が目立ちすぎるが、軍事的対立の側面だけに関心をよせるのは賢明ではない。米中ともに、相手に譲歩しす

ぎるという国内での批判を回避しつつも、必要ときには対話をし、共同歩調をとろうとしていることを見逃してはならない<sup>44</sup>。

それよりも、あまり強調されないので逆に気になるのが、いわゆる「中華民族」論の再登場である。周知のように、去る21年11月11日に閉幕した中国共産党第19期中央委員会第6回全体会議（6中全会）は、毛沢東、鄧小平時代につぐ第3の「歴史決議」を採択した。建党100年という節目でこの決議は、「中華民族の偉大な復興実現」という言葉をいたるところに散りばめていた。じつは、中華民族なる概念は2010年に劉明福・中国国防大学教授によって提唱され、2012年の第18回党大会以来、中国共産党の統治理念とされてきた。今回の「歴史決議」においても、新中国誕生以来の過去100年から第2の100年に向けて、「中華民族の復興という中国の夢」の実現を目指すと言っている<sup>45</sup>。

中華民族論は、台湾はもちろんのこと、韓国などからも猛反発を買った。中華民族という概念じたいが虚構にすぎないの言うまでもないが、地理的には幾らでも拡張可能な代物であり、一帯一路戦略と併せたときの「中国の夢」には果てしがたい。これが、対内的にナショナリズムを鼓舞するだけのものなのか、それともM・ピルズベリー（Michael Pillsbury）らが警告するように、来る100年以内に覇権国アメリカに取って代わろうとする「野望」の宣言なのか、その内容が不明確なだけに不気味である<sup>46</sup>。いずれにせよここでの筆者の立場は、いわゆる「陰謀論」に与するものではない。習近平政権の、「被害の歴史」の記憶を対外戦略に巧みに生かす手腕の見事さを指摘するにとどめる。

### 5-3 ウロボロスの輪

ウロボロスの輪は、最近では漫画やドラマなどで有名になっているらしい。そこでは、永遠の愛の誓いが主題とされているようだ。

本稿で筆者が強調したかったのは、集団的（集合的）な記憶としてのアイデンティティが、いかに「時代精神」なるものと相対的であり、政治権力にとっては重要な統治手段であったかという一点に尽きる。

歴史を宗教の言葉で語ってきたのはヘーゲルだけではない。歴史そのものが「死んだ祖先との協定」の記憶であり、記憶の伝承の叙述である。歴史が英雄伝説として人格化されて語られようと、あるいは非人格的に階級概念を軸に構成されようと、双方が神話の叙述であることに変わりはない。つまり歴史は、デュルケームの意味での宗教意識のひとつの表出形態である。歴史主義は貧困なのではなく、神話に添加された隠し味だった。

とはいえ、個人と社会（集団）との二元性は、克服しがたいアポリア（難問）として残される。前稿[2021]での筆者はパワー・エリート問題を、権力の遍在性と偏在性という同語反復的な呪文の繰り返しで回避するしかなかった。ウロボロスの輪は、ここでもまた、永遠なる難問の別表現であり、とめどない循環（ouroborosian circularity）の告白である。

1 Hegel [2015] ならびに Cassirer [2018]。この観点からいえば、哲学と宗教の歴史を一体のものとして論じた出口治明 [2019] は正鵠をついたものである。

2 Marx [1974]、p.35 および p.72。

3 Said [1979]。

4 服部正也 [2009]。

5 服部同上、p.308。

6 田村紀之 [2020]、pp.72-74。

- 7 田村紀之 [1994] および 田村&李 [1997]、とくに後者を参照。
- 8 文部省 [2018]、125 頁。
- 9 同上、456 頁。
- 10 同上、427 頁。
- 11 Linz [2020]、邦訳 77 頁。
- 12 Galbraith [1997] のいう対抗勢力 (countervailing power) に相当する概念とみておこう。
- 13 Krastev & Holmes [2021]。
- 14 Krastev & Holmes [2021]、p.105。
- 15 同上、p.77。アイデンティティと統合失調症との関係を論じたのは、Laing [2017] である。しかし R・D・レインは、アイデンティティに具体的な定義を下すことなく、「存在論的安定」のほぼ同義語として使っている。したがってアイデンティティをめぐる葛藤や喪失、錯乱などの諸現象は、「存在論的不安定」として一括される。ここで存在論的というのは、自分の眼に映る自分 (対自存在) と他人の眼に映る自分 (対他存在) の双方の関係を丸ごと理解しようという姿勢を指す。また彼は、集団的なアイデンティティについて語っているのでもない。
- 16 Havel [2019]、邦訳 112-113 頁。
- 17 Marx & Engels [1999]。
- 18 渡辺靖 [2020]。
- 19 Popper [2002]、p.143、邦訳 233 頁。
- 20 Popper 同上原書 p.130、邦訳 212 頁。
- 21 Tobin [1958]。トービンの危険回避行動理論の根底にある「期待効用定理」については、田村紀之 [1979] を参照されたい。
- 22 経済学諸学派の主張については、B. Snowdon 他 [1994]、あるいは根井雅弘 [2020] を紹介しておく。筆者はこれまで、効用概念を説明する際には、コークハイ、つまりコーラとウイスキーのカクテルをたしなむ消費者を引き合いに出してきた。まずこの消費者は、容器の形状の違いに騙されることなく、同じコークハイは同じものと判断できる。つまり、一滴でもウイスキーの量に違いがあれば、その違いを見分けることができる。つぎにこの消費者は、赤いグラスのコークハイを先に飲み、次に青いグラスのコークハイを飲んで同じように旨いと判断したときには、順序を入れ替えて、青いグラスの後で赤いグラスのコークハイを飲んだときにも、やはり同様に旨いという。A = B ならば必ず B=A と判断するわけである。さらに、この消費者は、二つのコークハイを直接比較したときと、あいだに別物、たとえば日本酒を介在させたときとで、判断に狂いが生じることはない。A=B で B=C ならば、必ず A=C と判断する。これだけでも凄い利き酒の名手となるはずだが、通常はこれに加えて、酒量が多ければ多いほど幸せになり、いくら飲んでも決して酩酊することがない、つまり、飽和点をもたない消費者を前提とする。このような厳しい諸条件を付けてようやく、経済学教科書の初歩に登場する無差別曲線なるものに接近することができる。しかし実際のわれわれの日常行動は遥かに大まかで曖昧な判断にもとづいており、いちいちコークハイの成分分析をせずとも、これまでの経験を通じて、酒の旨さと不味さを区別している。M・ボラニーのいう暗黙知、あるいは経験知の世界の重要性を無視することはできない。しかもここでいう合理性とは、目的・手段関係を扱う目的合理性のうちの、さらに限られた特殊なものでしかない。Polany [2003] を参照。
- 23 Durkheim [2014]、邦訳『宗教生活の基本形態』、上巻、199 頁。
- 24 同上、503 頁および 512 頁。
- 25 社会集団内部での権力構造にもデュルケームは目配りを怠らない。ただし、対抗勢力の生成という権力を巡る動学的な諸問題は議論の対象となっていない。J・K・ガルブレイスの諸著を参照。
- 26 Durkheim [2014] 上巻 95 頁、および下巻 411 頁。集合表象には既述のとおり、宗教に加え、言語や民族性などを根拠としたナショナリズムがある。そのいずれもが、アイデンティティの構成要素となりうる。貨幣もまた集合表象の所産といえるが、詳細は吉沢英成 [1994]、あるいは Sehgal [2018] に譲る。
- 27 自然状態や自然権を前提とした社会契約説と一線を画し、原始共産制の存在を仮定するマルクス主義にも背をむけたデュルケーム社会学のユニークさが浮き彫りになっている点に注目されたい。
- 28 朴仙容 [2021]。
- 29 日経、2011 年 11 月 18 日号。A・カミュの『ペスト』が読み直されている (Camus [1947])。
- 30 水上洋一郎 [2021]。



- 31 墓田佳 [2016] および田村紀之 [2017]。
- 32 藤崎康 [2008]、160-161 頁。
- 33 堀雅昭 [2001]、315 頁。
- 34 Durkheim [2014]、邦訳上巻、75 頁。柳田民俗学は知の宝庫として誇るべきものだが、性と差別の問題には正面から向きあってこなかったという批判がある。筆者は他国の風習などとの比較を怠ってきた、という難点を指摘しておきたい。その典型例は祭儀事例である（柳田国男 [2021]）。
- 35 田村紀之 [2021]、85 頁。
- 36 中村秀之 [2017]。
- 37 鄭殷溶 [2008] および 高暎兌 [2021]。本稿の表題は後者に倣ったもの。
- 38 拙著 [2007] では、1992 年の東亜日報の記事を引用し、戦闘中の戦死者 4,624 人、その他の戦死者 63 人、業務執行中の殉職者 304 人、そして疾病等による死亡者 160 人、という数字を掲げている。同書 227 頁を参照。
- 39 伊藤正子 [2010]。日本人も多くの婚外子を各地に残してきたはずである。
- 40 2021 年 11 月 16 日付けの朝日新聞。
- 41 だが、ロシア側がこの問題につき、繰り返し謝罪したことはほとんど記憶されていない。シベリア抑留については、栗原俊雄 [2009] および 富田武 [2016] をあげておく。
- 42 Orwell [2013]。
- 43 武藤秀太郎 [2019]。
- 44 今般の原油価格高騰に際し、米中の利害は奇しくも一致していた。
- 45 2021 年 11 月 13 日付けの日経掲載の「6 中全会コミュニケ全文」による。
- 46 Pillsbury [2015]。

#### 参考文献

- 阿部賢一 [2020]. 『ヴァーツラフ・ハヴェル「力なき者たちの力」：無力な私たちの可能性』, NHK 出版.
- Armstrong, Karen [1993]. *A History of God: The 4,000-Year Quest of Judaism, Christianity and Islam*, Ballantine Books.
- Armstrong, Karen [1996]. 『キリスト教とセックス戦争：西洋における女性観念の構造』（高尾利数訳）, 柏書房.
- Attali, Jacques [2021]. 『メディアの未来』（林昌宏訳）, プレジデント社.
- Boyce, Marry [2010]. 『ゾロアスター教：三五〇〇年の歴史』（山本由美子訳）, 講談社（文庫）.
- Camus, Albert [1947]. *La peste*, Éditions Gallimard. *The Plague*, translated by Robin Buss, Penguin Books, 2013. 『ペスト』（宮崎嶺雄訳、改版）, 新潮社（文庫）, 2004.
- Camus, Albert et al. [2006]. 『革命か反抗か：カミュ＝サルトル論争』（佐藤朔訳、改版）, 新潮社（文庫）.
- Cassirer, Ernst [2018]. 『国家の神話』（宮田光雄訳）, 講談社（文庫）.
- Ching, Leo T.S. [2021]. 『反日 東アジアにおける感情の政治』（倉橋耕平監訳）, 人文書院.
- 鄭殷溶 (Chung Woo-young) [2008]. 『ノグンリ (老斤里) 虐殺事件：君よ、我らの痛みがわかるか』, 寿郎社.
- 出口治明 [2019]. 『哲学と宗教全史』, ダイアモンド社.
- Durkheim, Emile [2014]. 『宗教生活の基本形態：オーストラリアにおけるトーテム体系』（山崎亮訳）, 2 Vols., 筑摩書房（文庫）.
- Eliade, Mircea [2000]. 『世界宗教史』（中村恭子他訳）, 8 Vols., 筑摩書房（文庫）.
- Erikson, Erik H. [1994]. *Identity: Youth and Crisis*, W.W. Norton & Co.
- Filipenko, Sasha [2020]. “ベラルーシ 抵抗の日々” (奈倉有里訳), 『世界』, 11 月号, 54-61.
- Freud, Sigmund [2009]. “トーテムとタブー” (門脇健訳), 『フロイト全集 12』, 岩波書店, 1-206.
- Freud, Sigmund [2010]. *Der Mann Moses und die monotheistische Religion*, Reclam. 『モーセと一神教』（渡辺哲夫訳）, 筑摩書房（文庫）, 2003. “モーセという男と一神教” (渡辺哲夫訳), 『フロイト全集 22』, 岩波書店, 2007, 1-173.
- 藤崎 康 (Fujisaki Ko) [2008]. 『戦争の映画史：恐怖と快楽のフィルム学』, 朝日新聞出版.
- 福井朗子 (Fukui Akiko) [2003]. “マイケル・ボラニーの思想：いわゆる「暗黙知」を中心に,” 『国際教育研究』, No.23, 22-38.
- Galbraith, John Kenneth [1983]. *The Anatomy of Power*, Gorgi Books.

- Galbraith, John Kenneth [1997]. *American Capitalism: The Concept of Countervailing Power*, Transaction Publishers.
- 墓田 佳 (Hakata Kei) [2016]. 『難民問題：イスラム国の動揺、EU 苦悩、日本の課題』, 中央公論新社 (新書).
- 長谷川宏 [1998]. 『ヘーゲルの歴史意識』, 講談社 (文庫).
- Havel, Vaclav [2019]. 『力なき者たちの力』 (阿部賢一訳), 人文書院.
- 服部正也 [2009]. 『ルワンダ中央銀行総裁日記』 (増補版), 中央公論新社 (新書).
- 堀 雅昭 [2001]. 『戦争歌 (いくさうた) が映す近代』, 葦書房.
- Hegel, Georg Wilhelm Friedrich [2015]. *Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte*, Suhrkamp Verlag.  
*The Philosophy of History*, translated by J. Sibree, Dover Publications, Inc., 2004. 『歴史哲学講義』 (長谷川宏訳), 2 Vols., 岩波書店 (文庫), 1994.
- 侯 孝 賢 (Hou Hsiao-Hsien) [2021]. 『侯孝賢の映画講義』 (卓伯棠編), みすず書房.
- Hunt, Lynn [2018]. *History: Why It Matters?*, Polity Press.
- Hunt, Lynn [2020]. 『フランス革命の政治文化』 (松浦義弘訳), 筑摩書房 (文庫).
- 伊藤正子 [2010]. “韓国軍のベトナム派兵をめぐる記憶の比較研究：ベトナムの非公式記憶を記憶する韓国 NGO,” 『東南アジア研究』 (京都大), Vol.48, No.3, 294-313.
- 伊藤義教 (訳) [2012]. 『原典訳 アヴェスター』, 筑摩書房 (文庫).
- Judis, John B. [2016]. *The Populist Explosion: How the Great Recession Transformed American and European Politics*, Columbia Global Reports.
- Jung, Carl Gustav (ed.) [1968]. *Man and His Symbols*, Dell Publishing.
- Jung, Carl Gustav [1973]. *Psychology and Religion, based on the Terry Lectures at Yale University*, Yale University Press. *Psychologie und Religion*, Deutscher Taschenbuch Verlag, 1994. 『人間心理と宗教 (ユング著作集4)』 (濱川祥枝訳, 改版), 日本教文社, 1970.
- Jung, Carl Gustav [1974]. *Psychological Reflections: A New Anthology of His Writings 1905-1961*, edited by Jolande Jacobi & R.F.C. Hull, Princeton University Press.
- 春日太一 [2020]. 『日本の戦争映画』, 文藝春秋 (新書).
- 高 暲 兌 (Ko Kyoung-Tae) [2021]. 『ベトナム戦争と韓国、そして1968』 (平井一臣他訳), 人文書院.
- Krastev, Ivan & Stephen Holmes [2021]. 『模倣の罟：自由主義の没落』 (立石洋子訳), 中央公論新社.
- 栗原俊雄 [2009]. 『シベリア抑留：未完の悲劇』, 岩波書店 (新書).
- Laing, Ronald David [2017]. 『引き裂かれた自己：狂気の現象学』 (天野衛訳), 筑摩書房 (文庫).
- Linz, Juan J. [2020]. 『民主体制の崩壊：危機・崩壊・再均衡』 (横田正顕訳), 岩波書店 (文庫).
- Löwith, Karl [2008]. 『共同存在の現象学』 (熊野純彦訳), 岩波書店 (文庫).
- Löwith, Karl [2016]. 『ヘーゲルからニーチェへ：十九世紀思想における革命的断絶』 (三島憲一訳), 2 Vols., 岩波書店 (文庫).
- Lukacs, John [2005]. *Democracy and Populism: Fear and Populism*, Yale University Press.
- Marcuse, Herbert [1961]. 『理性と革命：ヘーゲルと社会理論の興隆』 (榊田啓三郎他訳), 岩波書店.
- Marcuse, Herbert [2002]. *One-Dimensional Man: Studies in the Ideology of Advanced Society*, Routledge. 『一次元的人間：先進産業社会におけるイデオロギーの研究』 (生松敬三&三沢謙一訳), 河出書房新社, 1980.
- Marcuse, Herbert [2002]. *Eros and Civilization: A Philosophical Inquiry into Freud*, Routledge.
- Marx, Karl [1974]. 『ユダヤ人問題によせて・ヘーゲル法哲学批判序説』 (城塚登訳), 岩波書店 (文庫).
- Marx, Karl [1994]. *Early Political Writings*, edited by Joseph O'Malley, Cambridge University Press.
- Marx, Karl & Frierich Engels [1999]. *Manifest der Kommunistischen Partei*, Reclam. *Manifeste du Parti communiste / Critique du programme de Gotha*, Librairie Générale Française, 2014. 『共産党宣言』 (大内兵衛・向坂逸郎訳) 岩波書店 (文庫), 2010.
- 水上洋一郎 [2021]. “入管改革への課題,” 『世界』, 11月号, 170-179.
- 水島治郎 [2016]. 『ポピュリズムとは何か：民主主義の敵か、改革の希望か』, 中央公論新社 (新書).
- Moffitt Benjamin [2016]. *The Global Rise of Populism: Performance, Political Style, and Representation*, Stanford University Press.
- 文部省 [2018]. 『民主主義』, 角川書店 (文庫).
- 森本あんり [2015]. 『反知性主義：アメリカが生んだ「熱病」の正体』, 新潮社.

- Müller, Yan-Werner [2016]. *Qu'est-que le populisme? : Définir enfin la menace, traduit par Frédéric Joly, Premier Parallèle. What is Populism?*, Penguin Books, 2017. 『ポピュリズムとは何か』（板橋拓己訳），岩波書店，2017.
- 村瀬 広 [2016]. 『映画は戦争を凝視する』，新日本出版社.
- 武藤秀太郎 [2019]. 『「抗日」中国の起源：五四運動と日本』，筑摩書房.
- 中島岳志 [2019]. 『オルテガ「大衆の反逆」：多数という「驕り」』，NHK 出版.
- 中村秀之 [2017]. 『特攻隊映画の系譜学：敗戦日本の哀悼劇』，岩波書店.
- 根井雅弘 [2020]. 『現代経済思想史講義』，人文書院.
- 小川知世 [2021]. “ベラルーシ「抵抗の芸術」強権に屈せず,” 『日本経済新聞』, 9月22日号, 2.
- Ortega y Gasset, José [1995]. 『大衆の反逆』（神吉敬三訳），筑摩書房（文庫）.
- Orwell, George [2013]. *1984*, Penguin Books. 『一九八四年』（高橋和久訳、新訳版），早川書房（文庫），2009.
- 長田秀樹 [2021]. “「ふるさと」への旅,” 『東洋経済日報』, 10月15日号, 8.
- 朴 仙 容 (Park Sun Young) [2021]. “在日は他民族共生社会の「礎」に,” 『東洋経済日報』, 10月29日号, 8.
- Pillsbury, Michael [2016]. *The Hundred-Year Marathon: China's Secret Strategy to Replace America as the Global Superpower, with a New Afterword*, St. Martin's Griffin. 『China2049』（野中香方子訳），日経 BP 社，2015.
- Polanyi, Michael [2003]. 『暗黙知の次元』（高橋勇夫訳），筑摩書房（文庫）.
- Popper, Karl R. [2002]. *The Poverty of Historicism*, Routledge. 『歴史主義の貧困：社会科学の方法と実践』（久野取&市井三郎訳），中央公論社，1961.
- 羅 鍾 一 (Ra Jong-il) [2021]. 『ある北朝鮮テロリストの生と死：証言・ランゲーン事件』（永野慎一郎訳），集英社（新書）.
- Rowley, Charles Dunford [1986]. *The Destruction of Aboriginal Society*, Penguin Books.
- Said, Edward W. [1979]. *Orientalism*, Vintage Books. 『オリエンタリズム』（板垣雄三他訳），2 Vols., 平凡社（ライブラリー），1993.
- 佐野孝治 [1992]. “韓国経済へのベトナム戦争の影響：韓国における「NIEs」的發展.” 『三田学会雑誌』, Vol.84, No.4, 203-230.
- Sehgal, Kabir [2018]. 『貨幣の「新」世界史：ハンムラビ法典からビットコインまで』，早川書房（文庫）.
- Shambaugh, David (ed.) [2016]. *The China Reader: Rising Power*, Oxford University Press.
- Shrimley, Robert [2021]. “スコットランドの将来は,” 『日本経済新聞』, 10月20日号, 7.
- Snowdon, Brian et.al. [1994]. *A Modern Guide to Macroeconomics: An Introduction to Competing Schools of Thought*, Edward Elgar Publishing Company.
- 高橋繁行 [2021]. 『土葬の村』，講談社（新書）.
- 田村紀之 [1979]. “危険回避と資産選択,” 小泉明・花輪俊哉（編）『金融概論』，春秋社, 97-117.
- Tamura, Toshiyuki [1983a]. “Korean Minority in Japan: An Overview,” *Asian Economies*, No.46, 5-31.
- Tamura, Toshiyuki [1983b]. “Income Threshold, Contact Theory and Korean Immigrants to Japan,” *Journal of East and West Studies*, Vol.12, No.2, 51-65.
- 田村紀之 [1994]. “アジアの工業化を見る目：「東アジアの奇跡」への多様な視点,” 『TBR 経営環境レビュー』, Vol.4, No.6, 21-24.
- 田村紀之 [1995]. “考証 司馬遼太郎の「経済学」：文明史観のルーツを探る,” 『現代思想』, Vol.23, No.3, 186-204.
- 田村紀之 & 李 孝 徳 [1997]. “リヴィジョニズム・オリエンタリズム・ナショナリズム,” 『現代思想』, Vol.25, No.9, 187-198.
- Tamura, Toshiyuki [2003]. “The Status and Role of Ethnic Koreans in the Japanese Economy,” in C Fred Bergsten & Inbom Choi (eds.), *The Korean Diaspora in the World Economy*, Institute for International Economics, 77-97.
- 田村紀之 [2007]. 『韓国経験の政治経済学：ポスト権威主義の課題』，青山社.
- 田村紀之 [2012]. 『近代朝鮮と明治日本：19世紀末の人物群像』，現代図書.
- 田村紀之 [2016]. “植民地主義と映画：日韓のポストコロニアル問題,” 『国際政経論集』（二松學舎大），No.22, 1-44.
- 田村紀之 [2017]. “ポピュリズムと全体主義：植民地主義と映画 再論,” 『二松學舎大学創立百四十周年記念論文

- 集』, 5-52.
- 田村紀之 [2020]. “日本の〈右傾化〉と排外主義,” 『国際政経論集』 (二松學舎大), No.26, 57-86.
- 田村紀之 [2021]. “〈ナショナルなもの〉への回帰,” 『国際政経論集』 (二松學舎大), No.27, 65-99.
- Tobin James [1958]. “Liquidity Preference as Behavior Towards Risk,” *Review of Economic Studies*, Vol.25, No.1, 65-86.
- 富田 武 [2017]. 『シベリア抑留：スターリン独裁下、「収容所群島」の実像』, 中央公論新社 (新書).
- 渡辺 靖 [2020]. 『白人ナショナリズム：アメリカを揺るがす「文化的反動」』, 中央公論新社 (新書).
- Weber, Max [1963]. *The Sociology of Religion*, translated by Ephraim Fischhoff, Beacon Press.
- Weber, Max [1996]. 『古代ユダヤ教』, 3 Vols., 岩波書店 (文庫).
- Weber, Max [2012]. 『権力と支配』 (濱嶋朗訳), 講談社 (文庫).
- 柳田国男 [2021]. 『禁忌習俗事典：タブーの民俗学手帳』, 河出書房新社 (文庫).
- 吉沢英成 [1994]. 『貨幣と象徴：経済社会の原型を求めて』, 筑摩書房 (文庫).